

緑の塔

長谷川 喬士 (はせがわ たかし)
千葉県立市川工業高等学校 建築科

緑の塔

近年、理由は数多あるが人と人とのコミュニケーションが少なくなってきている。その主な原因は私が思うにそのような決まったおおよけの場がないからであると考え、この建物を設計した。

「ご縁」と「円」

1階のレストランを利用した、さまざまな人たちが出会い、コミュニケーションをとる。良いご縁をもたらす場所になってほしいと考える。そこで、「ご縁」をもたらせるように、円形の建物にした。

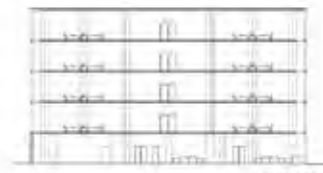
「ご縁」と「緑」

全体的には緑化をしていく。なぜ緑化をしたのかというとそれにより自然のカーテンとなり建物の温度を改善できる。

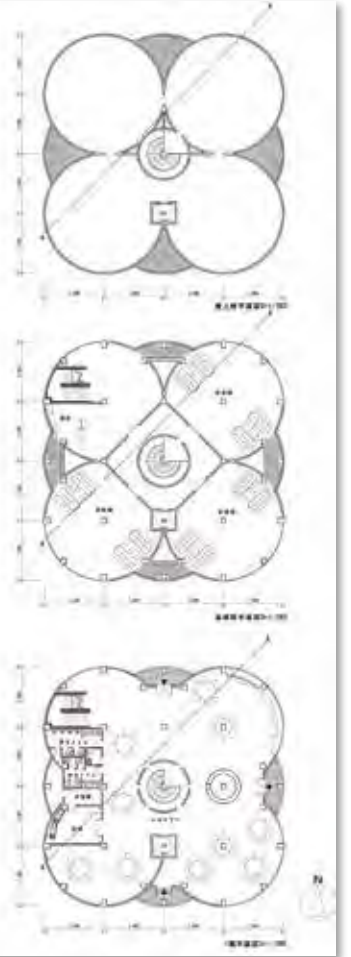
このテナントが地域住民とテナント利用者との架け橋となってほしいと考えた。



窓面を緑化して、部屋の温度を下げる。1階部分は外を見るため、緑化は避けている。

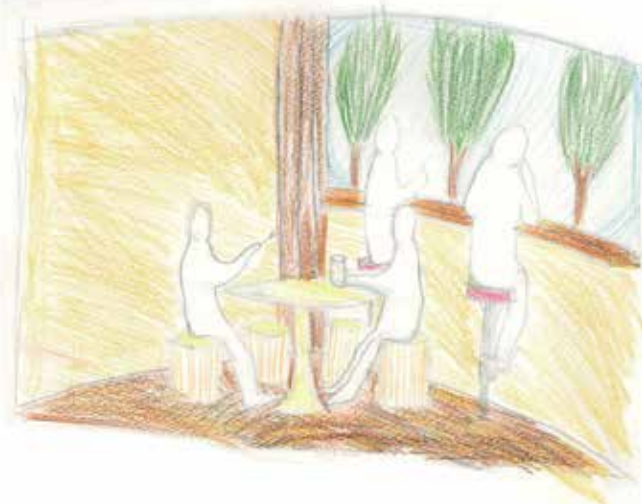


しゃべりやすい雰囲気にするために、壁の色を明るくした。床はぬくもりを感じるように、木材にした。



近年、人と人とのコミュニケーションが少なくなってきている。その主な原因はおおよけの場がないからであると考え、この建物を設計した。

「ご縁」と「円」1階のレストランを利用した、さまざまな人たちが出会い、コミュニケーションをとる。良いご縁をもたらす場所になってほしいと考える。そこで、「ご縁」をもたらせるように、円形の建物にした。このテナントが地域住民とテナント利用者との架け橋となってほしいと考えた。



講評

リアルなコミュニケーションが希薄になり、そのあり方が問われる現代の社会。

この大きな問題に対して、建築空間とプログラムによって人々の関係性を取り戻そうとした意欲的な案である。

「和」「輪」をモチーフとして作られた計画は、プランを見るとその空間の美しさを感じ取ることができる。模型が無かったのは心残りではあったが、円が幾重にも織り成される空間は優美であり、作者が思い描く人々に親しまれ、コミュニケーションにあふれる空間が生み出されている事が想起できる。

提案の内容もさることながら、印象的であったのは大会前に提出されていたプレゼンシートから作品が大きく成長していた事である。

学内での提出が終わったにも関わらず、少しでも作品を良くしようという作者の思いは素晴らしく、そして確かに良い作品へと変わっていた。

卒業設計には終わりには無く、作り上げる情熱があればより良い作品として成長していく。

実社会でのプロジェクトでも同じであろう。設計して終わりではない、とことん作品に向き合い続ける事の大切さを、長谷川君の作品は気づかせてくれるのである。

(審査委員：皆川 拓)